

たまに見かけても「おやつノ変に愛嬌のあるヤツだな」と足を止めるくらい。茸といえ、森に潜むどこか遠い物語の世界を想像し、現実的なイメージはあまりなかった。それが俄に興味を膨らみ、茸狩りを堪能した頃がある。

茸目線で山を歩くと、こんなにも身近に多種豊富にあったのかと驚く。また、自生する原初的な場の雰囲気やユニークな姿は、僕を虜にするには十分であった。美麗、妖艶、滑稽、摩訶不思議、茸というヤツ全くもって千姿万態。毒をも隠し持つそんな妖精や道化たちが、人知れずヒソヒソとささやき合っているのを垣間見るような、下界を遠く離れた世界に誘ってくれた。

自分用の図鑑を作ろう

と、色鉛筆でスケッチを始めた。姿、色かたちを見つめ、黙々と線を走らせる作業は楽しく、飽きることがなかった。その日も裏山で採ったたくさんの種類を古新聞の上にずらりと並べて幾つか描き、あとは明日にと、天然の恵みを肴に一杯やって眠りに就いた。

そして翌日、続きを描こ

茸

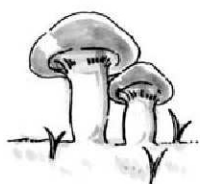
うと画室への階段を上がり切った瞬間、「うえっ！」と立ち尽くしてしまった。

水分が失われて行く茸から這い出した乳白色の虫が、20畳以上もある床板全体を覆い尽くし蠢いているではないか。

そのぶったまげの光景に目を奪われながらも「ん！」ということとは前夜の茸料

理、何十匹も僕の口に入っていた…。究極の自然食シヨウジヨウバエの幼虫、高タンパク質の摂取だ。いやはや。それにしても、よくまあ、これだけの数に宿を貸してやるものだ。たいしたもんです。

食味で言えば、ちょっと



した苦味と歯応えのいいクロコ(クロカワ)が一番好きなのだが、森毅(数学者)の軽妙洒脱なエッセーに、自分は茸大好き人間、特にクロカワが最高とあった。

さらには、茸だけ食べて生きてる？ という逸話のある音楽家のジョン・ケー

ジが来日の折、「これが日本が一番うまい茸だ」と言っ、京都でクロカワを食べさせたと自慢げに書いていた。何とも我が意を得たりである。

ところが茸熱は数年で冷め、それからはや30年の時が流れたが、かつて味わった山の懐に抱かれたような心地よさは、今も忘れられない。道なき木々の間を抜けて歩く軽やかな気分、足裏に残る枯れ葉の弾力、キラキラ光る木漏れ日と植物の濃い影、汗にヒヤッと触るやわらかな風、どきりとさせる獣の気配、一面に漂う茸の匂い。

そして、写生した茸一つひとつを見ると、山野を駆け巡っても疲れを知らない、若いからだがあったことも思い起こさせてくれる。

(吉田 淳治・画家)